様式６「課題研究レポート」

研　究　テ　ー　マ

―サブテーマ(例)○○を通して―

○○市（市立）　○○○○園　教諭　氏名　△△　△△

Ⅰ　テーマ設定の理由

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

　　①

　　②

　　③

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

Ⅳ　実践の振り返り

Ⅴ　今後の実践に向けて

〈主な参考文献〉

＊2ページから3ページにまとめること

様式６「課題研究レポート」　　　　　**作成上の留意点**

　　　　　　　　　 　研　究　テ　ー　マ　　　【ＭＳゴシック14ポイント】ｾﾝﾀﾘﾝｸﾞ

　　　　　　　　　　　―サブテーマ(例)○○を通して―【ＭＳゴシック12ポイント】ｾﾝﾀﾘﾝｸﾞ

(1行あける)10.5ポイント

○○市○○○○園■教諭■○○■○○■■■

(1行あける)10.5ポイント

園名、職名(教諭または保育教諭)、氏名を記入すること。ＭＳ明朝10.5 P

■は全角スペース

Ⅰ■テーマ設定の理由（課題設定の理由）

　　　・保育の中で、課題となっていることを把握し、課題からテーマを導く。

　　　・学級の実態として『「○歳児（○年保育）」計○名』を記載する。

Ⅱ■課題に対する具体的な手立て

　　　・課題解決のために、どのようなアプローチを行うことが効果的かを考える。

Ⅲ■課題解決に向けた取組（実践）

　　・どのように保育を展開していったかについてまとめる。

　　・取組を進めるためにどのような幼児理解をし、環境や援助の工夫をしてきたかについてまとめる。

・課題解決に向けての取組を通して幼児の反応（幼児の声、姿、行動等）はどうであったか、変容の様子をまとめ、評価を行うとともに、計画や実践の見直し（PDCA）を図り、環境の再構成やアプローチの仕方等を改善する。

Ⅳ■実践の振り返り

　　　・成果や課題、実践を通した自身の気づき、考えなどをまとめる。

Ⅴ■今後の実践に向けて

　　・課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどをまとめる。

【表記の例】

Ⅰ　テーマ設定の理由

　１■○○○　　　　　　　ＭＳゴシック10.5 P

(1)▋○○○

(2)▋○○・・　　　　　ＭＳ明朝10.5 P

①■○○・・

ア■○○・・

大見出しは、

**ＭＳ**ゴシック12P

〈主な参考文献〉（三冊程度を列記する）

■著者名■発行年■『文献名』■出版社　←ＭＳ明朝９ｐ

＊　上下マージン　20mm

＊　左右マージン　20mm

＊　１行の文字数　49文字

＊　１ページの行数　50行

＊　ページ数　**２～３ページ**

**＊　活動や幼児の様子を写真を用いて**

**掲載する場合は、個人が特定できな**

**いように写真を加工すること。**

■は、空白を空けるという意味（全角スペース）

▉は、空白を空けるという意味（半角スペース）

()並びに()の中の数字は半角にすること

様式６「課題研究レポート」**作成例**

※昨年度の様式に基づいて作成されたレポートです。様式や枚数が変更になっているため、参考程度にご覧ください。

幼児が伝え合う楽しさを感じるようになるための援助や環境の工夫

－ポートフォリオの活用を通して－

○○市立○○園　教諭　△△　△△

Ⅰ　テーマ及び課題設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境が少子化、核家族化、都市化、情報化、人間関係の希薄化等、社会の急激な変化により、親以外の大人や他の幼児などと関わる機会が減少してきている。また、共働き社会が進み親子が家庭で過ごす時間が減り親子でゆとりをもって会話を楽しんだり、やり取りを通して相手に伝えたりする経験が減ってきている。そこで、幼稚園においては幼児の言葉をより豊かに育むため、教師や同年齢の他の幼児と関わる場や豊かな体験ができる場としてその役割が大きい。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容の取り扱いでは、(1)「言葉は，身近な人に親しみをもって接し，自分の感情や意志などを伝え，それに相手が応答し，その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものである・・・(中略)」、(2)「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに，教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき，言葉による伝え合いができるようにすること。」とある。これらのことから、教師は幼児が安心した雰囲気の中で幼児の思いを受け止め、幼児が伝えたくなるような体験を重ね、伝えたい相手と繋がりがもてるようにしていくことが大切といえる。

本学級は、５歳児（３年保育）28名で、実態としては、集団での生活が初めての子が約半数おり、同年齢の幼児との関わる経験が少ない子がほとんどである。また、教師へ身振り手振りで伝えようとしたり、単語で要求を伝えようとしたりする姿が見られる。幼児同士においては、会話が一方的になったり教師を媒介として思いを伝えようとしたりすることがしばしば見られた。これまでの保育を振り返ると、教師が先回りし幼児の思いをくみ取り伝えていたことや、幼児の表情や身振り手振りから言葉をあまり交わさずに要求に応えていたことなどがあった。

しかし、幼児は自分で思ったことをすぐに言えるようになる訳ではなく、教師や他の幼児との関わりや園生活を過ごす中で心動かされる体験を通して、伝えたくなる思いが出てくる。また、幼児の姿を観察していると、伝えたいことがあっても個々の生活経験の違いから話題を共有しにくいこと。集団生活が初めての幼児にとっては、園生活の中で初めて聞く言葉が事・物・状況などと結び付きにくいことが現状である。そのような中、実際の物や写真、イラストなど視覚的な補助があると物事が伝わりやすく幼児にとって理解がしやすいということが分かった。

そこで本研究において、幼児が自分の思いを言葉で伝え合うことができるようになるには、身近な人との関わりの中で、話を聞いたり自分の思いを受け止められたり経験を重ねることで身につくのではないか。また、様々な体験の中で幼児が言葉のやり取りをする際に、視覚的なツールを活用することで、さらに伝え合うきっかけや伝わる喜び、楽しさを感じられるのではないかと考え、本テーマを設定した。その手立てとして「ポートフォリオ」を活用し、幼児が伝え合う楽しさを感じるようになるための教師の援助や環境の構成について研究を進めていく。

Ⅱ　研究内容

１　伝え合う楽しさを感じるとは

幼稚園教育要領「言葉」の内容の取扱いには、(1)「言葉は，身近な人に親しみをもって接し，自分の感情や意志などを伝え，それに相手が反応し，その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して，幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし，言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。」と記されている。このことから、第一に教師や友達との温かな人間関係を基盤にしながら、幼児が安心して自分の思いや考えを伝えられるようになることが必要だと考える。

２　言葉が伝わり合うようになる過程

⑴　人とつながる言葉

自分のありのままを受け止めてくれる教師や友達が周りにいることで、驚き、感動、疑問など、自分の中に生じた色々な思いを子ども達は様々な言葉で伝えようとするようになっていく。次第に伝えたくなる相手の存在を意識し、関わりや出来事を通して伝えたい事柄を一人一人がもつようになる。

⑵　体験を通して伝わる言葉

教師や友達との間で、言葉のやり取りをたくさん重ねていくことを通して、必要に応じて伝えたり言葉を選んだりしながら、相手に分かるよう自分の考えや思いを伝えられるようになっていく。

⑶　言葉を介した出来事の共有化

園生活において、子ども達は色々な出来事に出会って生活している。子ども達はその出来事を通して、様々なことを感じながら生活を重ねている。そうした生活を経て、自分の思いや考えを言語化して外に表していくようになる。次第に、周囲との関係など複雑な内容も伝えられるようになっていく。

３　伝え合う言葉を育むための援助と環境とは

⑴　伝えたい人、伝えたいことを受け止めてくれる人がいる環境

子どもの思いを受けとめて心のよりどころとなったり、体験を共有し言葉にしてくれたりする保育者の存在や、様々な言葉を必要とし用いる集団生活、様々な遊びの中で言葉を交わす仲間の存在などは、子どもの伝え合う言葉を育むための重要な環境(人的環境)である。

⑵　伝えたいことが生まれる環境

伝え合う経験や伝え合うための言葉を豊かにするためには、園生活を通して様々な人と出会う機会や、様々な行事や出来事、状況に応じた言葉の使い方と出会う機会、言葉の楽しさや面白さを知る機会、文字に接する機会などが必要である。

⑶　環境の中の人的環境「教師の援助」とは

伝えたい、話を聞きたいと思えるような子どもと子どもの関係を育てていくことも重要である。教師が子ども同士の思いを丁寧に聴くこと、また子ども同士のやり取りの際にはお互いの気持ちが伝わるように、時には分かりやすい言葉で伝え直したり、耳を傾けて話を聞くことを促したりすることも大切になる。さらに、伝えようとしている子どもの思いに寄り添うことも子どもの伝えたい思いを大切にしていくことになる。

４　子どもの言葉と教師の役割

⑴　子ども達一人一人の状況や発達、課題に応じて必要な言葉をかけること。また、子どもが発する思いや考えを受け止めることも大切な教師の援助となる。

⑵　話すときのやり取りのテンポ、声の大きさや抑揚、タイミング、表情、立ち振る舞いを子どもの視点で行う必要がある。子どもの思いや活動の流れに沿って即時に判断する即興性も教師には必要である。

⑶　言葉が自然と出てくるような雰囲気を作ったり、教師の声を重ねたり、子どもの言葉を待ったりなど、その場や子ども一人一人に応じて言葉のやり取りを大切にしていく。

５　保育におけるポートフォリオの活用について

⑴　ポートフォリオとは

幼児がどのような経験をしたかを追った記録の集まりであり記録が蓄積されたものを表す。写真を用いた記録も含まれるが中には、幼児が描いた絵や作品などが盛り込まれることもある。ポートフォリオは、幼児がその間にどのような経験を積み重ねてきたかが分かる記録となる。

また、保育における記録の方法としてドキュメンテーションがある。ドキュメンテーションは、保育の記録を文字や写真を効果的に用いて可視化することができる。可視化された記録は、幼児がモノやヒトと関わっている状況を意味をもった状態で映し出すことができ、それらを見た人との間にコミュニケーションが生まれる。そのことがまた新たな活動(保育)を生み出すきっかけとなる。保育を充実させるための重要なツールになると考える。

　 ⑵　ポートフォリオを取り入れた保育の展開について

これまでも、幼児期の発達に合わせ、文字だけでなく写真やイラストなどの「視覚的なツール」を活用してきた。今回の研究においてその有効性を生かし、幼児の園生活の写真や幼児が描いた絵、作品などを綴り、ポートフォリオにして幼児の育ちを可視化していく。それらを幼児や教師、保護者が共有して見ることで、伝え合うきっかけとなるツールとして取り入れていく。さらに、幼児が自分の思いを伝え合う楽しさや伝わる喜びが味わえるよう、教師の援助や環境構成を工夫しながら本研究を進めていく。

Ⅲ　保育計画

|  |  |
| --- | --- |
| 月　日 | 研　究　計　画 |
| ４月～  　１～２月 | 幼児の実態把握、テーマ設定  実践研究、考察(実態把握)、環境の構成  ポートフォリオの作成  文献による研究  　　・言葉で伝え合う楽しさについて  　　・ポートフォリオについて  　研究のまとめ |

Ⅳ　課題解決に向けた取組

◆実践事例１：「きらきらぶっく」ポートフォリオができたよ！（５月～）

《幼児の実態》

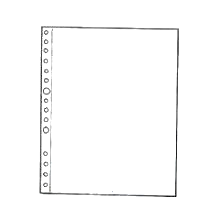
好きな遊びを通して、教師や友達と関わろうとする場面が増えてきている。しかし、自分の思いを身振り手振りや表情などで伝えようとする幼児や「先生、折り紙」、「先生、トイレ」など２語文で伝える姿が見られた。また、幼児同士においては、一方的に話したり相手が話しかけていてもその場から離れたり、会話が続かない様子が見られた。さらに、幼児にとって園生活の中で初めて耳にする言葉が多いため、物・場・状況など言葉と関連づけることが難しく、伝える場面において不安そうにする幼児もいる。

《教師の願い》

幼児にとって伝えたくなる「こと」が具体的にあり、伝える「きっかけ」など、視覚的なツールがあることで安心し、自分の思いや考えを伝える心地よさを感じてほしい。同時に、伝えたことが教師や友達、保護者へ受け止められる温かさや喜びを味わってほしい。

　 《環境構成》

幼児が自分の作品やクラス便りなどを継続して綴り、自ら手に取って見

返すことができるよう、ファイル「ポートフォリオ」を作成する。

個人用ポートフォリオの作成 (ファイルの種類など)

・幼児が手に取り見やすい大きさ、強度などを考慮する。

・ページが容易に追加しやすい２穴ファイルを使用する。

・作品など、幼児でも出し入れできるクリアポケットを用意する。

・幼児が自分のポートフォリオを取り出せるようにテーブルの上に置く。



今後、ポートフォリオに綴っていくもの(主な内容)

・幼児が見て園生活を思い出し、自ら伝えたくなるようなもの。

・クラス便りや幼児の描いた絵、作った物、写真などを綴る。

《教師の援助》

****・幼児主体であることや幼児にとってより身近な物と感じられるよう、学級でファイルの名前を相談する。(「きらきらぶっく」に決まる。)

・キャンディー屋さんやジュース屋さんなど、ごっこ遊びで描いた絵を「きらき

らぶっく」へ綴ることを学級で相談し、幼児と一緒に作品を綴る。

・幼児が伝える楽しさや喜びを感じられるよう、幼児のイメージや思いを受け止

めていく。また、キャンディーやジュースの味を色や形から連想し、言葉で伝

え合う楽しさを味わえるようにしていく。

・伝えたくなる雰囲気や伝えようとする幼児の意欲を大切にする。

《幼児の姿》

　 　・自分の作品を教師と一緒に見ながら綴ることで、教師が「不思議な色、綺麗だね」、「美味しそう、

いだだきます！」と伝えると、「これ、○○と同じのだよ」、「○○はピンクが好きだからピンクが

いっぱい！」など遊んでいる時よりも自分なりの思いを次々に伝え合う姿が見られた。

　　 ・教師と話している姿に周りにいた幼児が関心を寄せ、「○○もコーラとジュースあるよ！」、「○○は虹色キャンディーを描いたよ」など、進んで話に加わったり絵を見比べたりと関わる姿が見られた。

　　 ・幼児が降園時、迎えに来た家族を教室へ誘い、「きらきらぶっく」を見せる姿が見られた。家族から「いいね！」、「たくさん作ったね」と言われ喜んでいた。また、幼児も「これ絵本みたいでしょ！」、「これはチョコ味のジュースだからね」など、親子で一緒に会話を楽しみながら見る姿が見られた。

《 考 察 》

・ 絵(作品)というツールを通して、幼児自身が遊びを振り返る機会になり、自分の思いを言葉にすることで、教師とイメージを共有し、会話を楽しむ姿が見られた。

・自分の絵を見返したり、側にいる友達の物を覗き込んだりしながら「あー、同じだ！」、「でも違うよストローが２本あるから！」など、絵を一緒に見ることで同じ物や違いを比較し、互いに伝え合う場面が見られた。

・自分の「きらきらぶっく」を作成し、作品を綴ったことで誰かに見せたい、伝えたいという思いに繋がった。幼児にとって身近な存在である家族へ自ら伝えようと、「きらきらぶっく」を通して会話をし、思いを受け止められる経験や満足感を得ていた。

◆実践事例２：お家の人へ見せたいな！クラス便りの発行を通して(６月～)

《幼児の実態》

　 実践１の様子から、伝えたい出来事や伝えるツールとなる物があることで幼児自身が伝えやすくなり、伝えた相手と思いを共有し会話を楽しむきっかけとなっていた。また、園での出来事を身近な存在である家族へ伝え、受け止められることを喜び、親子で会話を楽しむ姿が見られた。

《教師の願い》

幼児が楽しかった出来事を「伝えたい」という思い(意欲)を保護者へもさらに繋げてほしい。また、クラス便りの写真を家族で一緒に見ることで、幼児と保護者の会話のきっかけが増えてほしい。さらに、幼児の姿を園(教師)と家庭(保護者)で共有することで、相互に幼児の育ちを支援していきたい。

《環境構成》

クラス便りの作成について（幼児が伝えたくなるツールとして）

・幼児の活動の様子の写真を多めに取り入れたクラス便りを発行する。

・幼児に向けたコメントを保護者が記入するコメント欄を設ける。

→保護者がコメント欄を記入後、クラス便りを幼児が担任へ渡す。

コメントは家庭(親子)での様子を知る手立てなどとして活用する。

《教師の援助》

・配布前に学級にてクラス便りを見せながら、園で遊んだ様子が載っていること

　を紹介する。また、幼児が家族へ見せたい伝えたいという期待を高めていく。

・家庭での会話が広がるよう「この写真は何の時だったかな？」、「キュウリの葉っぱを触ったね、どうだったかな？」、「色水の作り方をお家の人は知っているかな？」など、幼児の言葉を引き出しながら園での出来事をみんなで思い出す機会を設けていく。

《幼児の姿》

・「色水はアサガオで作った！」、「○○が写っている！」、「またやりたいな～」など、クラス便り

を見ながら教師に積極的に話しかけていた。また、幼児同士で「キュウリ、おかわりしたよね～」、「○○がいる！」など、側にいる友達と互いに伝え合う姿が見られた。

《教師の援助》

・幼児と保護者からのコメントを一緒に読み、その喜びや思いを共有できるようにする。

・学級において、家族へ伝えられた姿や何を話したかなどを共有し、できた姿を認め合う機会にする。

　　 ・保護者のコメントから、家庭での幼児の様子を知り、幼児とさらに話題を広げていく。

《幼児の姿》

　 　・クラス便りを教師へ手渡しながら、「先生、お母さんね、色水やったことあるって！」、「キュウ

リ、お家でも食べてみたよ！」、「お兄ちゃんがこれ見て笑ってた～」など、家庭での会話の様子を教師へ嬉しそうに伝えていた。

・保護者からのコメントを学級で読むことで知らない言葉に触れたり、保護者からの思いを感じとったりしていた。また、「○○のお父さんも、すごいって言ってたよ！」など、コメントを紹介することで自分の家族のことを思い出し、話題を共有する姿が見られた。

《 考 察 》

・クラス便りの写真を見ることで、幼児が園での出来事を振り返ることができ、教師や友達、家族と共通の話題をもちやすくなった。そのことで自分の思いを積極的に伝えようとする姿が増えた。

・学級でクラス便りを見せながら紹介したことで、教師と幼児の会話が広がった。また、それをきっかけに、他の幼児が自分の思いも伝えたいという意欲や姿に繋がった。

・保護者のコメント欄より、クラス便りを見ながら家族へ遊びの説明をしたり、友達の名前を話したりなど、幼児が家族へ進んで伝えようとする姿が見られたことが分かった。また、教師が家庭での幼児の姿を把握することができ、幼児と新たな話題を通して思いを伝え合うきっかけが増えた。

◆実践事例３：友達と一緒に見よう！ポートフォリオの掲示(７月ごろ)

　 《幼児の実態》

　　　 クラス便りの写真を介して学級みんなで園生活を思い出し、幼児同士が言葉を交わすきっかけなっ

ていた。中には、友達との会話に加わりたいが、クラス便りを見ることに一生懸命で話すタイミング

を逃す姿や、話しかけても離れて座っているため気づいていない場面が見られた。

《教師の願い》

　　 幼児にとって共通の出来事や思いをもち、写真などを見て振り返る場があることで、幼児同士が伝え合う場面に繋がった。そこで、園生活の遊びの様子をポートフォリオとして作成し教室に掲示していく。また、ポートフォリオの写真を幼児同士が一緒に見ることで、会話や繋がりを広げてほしい。

《環境構成》

・みんなで見ることができるよう黒板へ掲示する。

　 《幼児の姿》

・関心を示し１、２人が入れ替わるように見ていた。

・友達と写真を指差し、写っている姿を喜んでいる。

《教師の願い》

写真を見ることで自分や友達の姿を見つけて喜ぶ姿

や教師と会話をするツールにはなった。しかし、友達との会話が広がるような場面は見られなかった。そこで、幼児同士が集い伝え合う空間となってほしいと願い、ポートフォリオの掲示場所を移動する。

　 《環境の再構成》

・幼児の動線である絵本棚の前のテーブルの上に置く。

　 《幼児の姿》

・テーブルの上に置いたことで、気づいた子が肩を寄せ合い覗き込んでいた。

また、友達の姿やその話し声に関心を寄せ、さらに集う様子が見られた。

「遊びの場面(ポートフォリオ)を見ている幼児の会話の様子」

Ａさん：○○すごい！長く作っている。

　　Ｂさん：(嬉しそうに笑顔を返す)

Ｃさん：あっ、これＣが見つけて、やってみたやつだ！

　　Ｄさん：できたの～？

Ｅさん：できていたよね！

《 考 察 》

・テーブルに置いたことで、幼児が肩を寄せ合い集うことができた。一緒に見ることで、写真に写って

いる姿を互いに喜び、会話のきっかけや伝え合う空間になっていた。

・みんなで同じ物を見ることで、誰が話しているのか何のことを伝えているのかなど、瞬時に話題を共

有しやすい利点があり、その場にいるみんなが会話に加わることができていた。

・写真を通して友達の話を聞き、他の遊びの存在を知り自分もやってみたいと興味をもつ幼児もいた。

また、写真を互いに見て会話をしたことで、友達との繋がりを感じ、誘い合って遊ぶ姿が見られた。

◆実践事例４：「きらきらぶっく」に貼りたいな。見つけた物を発表する。(９月～)

《幼児の実態》

継続して「きらきらぶっく」へクラス便りや自分の作品を綴ることで、思い出しては見返し自分だけの物と大切にしている。また、園庭で見つけた物(葉や貝殻など)を紙に貼って綴り、帰りの会などで紹介することを楽しんでいる幼児が増えた。一方、自分もやってみたい、発表したいと意欲をもつが、綴るという行動まで結びつかないことが多々見られた。

《教師の願い》

　　 幼児が自分で見つけた物に対して抱いている「見せたい、伝えたい」という意欲や思いを大切にしたい。その物を通して幼児が自分の思いや考えを伝えるきっかけや伝える場に繋げていきたい。また、幼児がすぐに作成できるようテンプレート(見つけた物を貼る台紙)用意することで、より多くの幼児が取り組んでほしい。その後、自分で紹介し発表する楽しさを経験してほしい。

《環境構成》

テンプレート「見つけたゾウ！」見つけた物を貼る台紙･･･を作成

・園庭で見つけた貝殻や葉、種などを貼りやすいように枠を設ける。

・見つけた日の日付や場所、幼児の思いを記入する欄を設ける。

・テンプレート(台紙)は、幼児が自分で取って貼ることができるように置く。

「見つけたゾウ！」の台紙

・綴る作業が途中でも再開しやすいようにクリアファイルを用意する。

《教師の援助》

　 ・幼児が自分なりの言葉で伝えようとする意欲や姿を受け止めていく。

・幼児がテンプレート(台紙)に貼った後、日付や場所、思いや考えなど教師が記入し一緒に綴る。

・その日の帰りの会などで、幼児が発表する機会を設ける。幼児の思いが学級全体へ伝わるよう発表する姿を見守り、伝える楽しさが感じられるよう、時には教師が質問し幼児の思いを一緒に伝えていく。

《幼児の姿》



　・発表する場では、緊張しながらも見つけた物を紹介することを楽しみ、

「ハート形の葉っぱを見つけました」、「これは砂場にあった貝柄です」

など、教師や友達に自分なりの思いや考えを伝えることができた。

　 ・友達の話を聞いて「○○も見つけたい！」、「明日、どこにあるか教えて

ね」と、進んで友達に尋ねたり喜んで友達に教えたりする姿が見られた。

　 ・その後、幼児同士で綴った物を見せ合い「それ何？どこで見つけたの？」、「分かるよ、同じのあるよ」など、友達の物に関心をもち、その物を介して聞いたり答えたりやり取りを交わしていた。

・発表する場を繰り返し経験し、教師や友達に自分なりの言葉で自信をもって伝えていた。

《 考 察 》

・自分が見つけた「物」があることで、自ら進んで自分の思いや考えを伝える意欲に繋がった。

・学級での発表の場を通して、幼児自身が出来事を振り返り自分なりの言葉で伝えようする姿が増えた。また、発表したことで教師や友達と会話をするきっかけになり、自然と伝え合う姿が見られた。

・テンプレート(台紙)のイラストや枠があることで視覚的にも分かりやすく、容易に貼り付け綴ることができ取り組む幼児が増えた。同時に、幼児が自ら発表したいという意欲や姿に繋がった。

・幼児にとって見せたい物があることで、自ら伝えようとする意欲に繋がった。そして、他の幼児にお

いても自ら友達へ話しかけるなど、一緒に活動を進める姿へと広がった。

Ⅴ　実践のまとめと考察

１　実践のまとめと考察

⑴　伝えたくなるツールがあることで、幼児がより安心し相手へ伝えようとする思いや姿へと繋がっ

た。

⑵　安心して教師や保護者に自分の思いを受け止めてもらう経験を積み重ねたことで、友達との遊びや生活の中でも互いに思いを伝え合う楽しさを感じながら過ごす姿へと変容が見られた。

⑶　思うように言葉が出ない幼児にとっては、情報を得たり思いを伝えたりするツールとして分かりやすく教師や友達とコミュニケーションをとる機会が増え、繋がりを広げていくことができた。

⑷　家庭と連携することで、幼児が身近な人(家族)と伝え合う喜びや楽しさを味わう経験ができた。また、「きらきらぶっく」を家族と見ることで話題が共有しやすくなっていた。そのことから、幼児が自分の思いを受け止めてもう温かさを感じるとともに「きらきらぶっく」への愛着が高まっていった。

２　課題

⑴　取り組みを継続することや幼児が手に取って見る時間の確保が重要である。ポートフォリオやクラス便りなど、活動をしてからその作成まで時差があると、伝えたい気持ちや興味・関心の低下が見られた。そのことから、内容に計画性をもたせ掲示や発行のタイミングを工夫が必要であった。

⑵　幼児にとって、作品などを先に「きらきらぶっく」に綴ることになり、保護者へ見せたい伝えたい思いが低くなる姿が見られた。家庭へ持ち帰りその後、綴る方法があってもよかった。

⑶　今後も幼児と一緒に取り組む視点で、幼児が主体的に会話を広げる経験を積み重ね、伝え合うことが楽しくなるような援助や環境を工夫し取り組んでいく。

〈主な参考文献〉

文部科学省　2018　『幼稚園教育要領解説』　　フレーベル館

秋田喜代美・野口隆子　編著　2009『新保育シリーズ保育内容　言葉』　光生館

請川慈大・高橋健介・相馬靖明　編著　2016　『新時代の保育１　保育におけるドキュメンテーションの活用　ななみブッ

クレット№4』　ななみ書房